

岬之町だより

第1回「三百目の謎」

日本銀行 下関支店長 岩下 直行

日銀下関支店は、下関市岬之町にある。トウカエデ（唐楓）の並木が続く中通りの一角、西を入江町、東を観音崎町に挟まれた、東西に長い三角形の敷地である。

この岬之町という地名を「はなのちよう」と正しく読める人は、地元以外にはなかなかいないだろう。山口県には難読地名が多いけれど、これはかなり難度が高い。それにしても、なぜこの地に岬之町という名前が付いたのだろうか。

中通りを商工会議所前から豊前田まで歩くとしよう。その道はおおむね平坦だが、ちようど日銀の南側を通るところが少しだけ高くなっていて、東西に延びるゆるやかな坂道の頂上であることが分かる。江戸時代のこの辺りは、現在の王江小学校から国道の南にまで張り出した丘の一部だったが、明治時代に掘削されて道を通つたらしい。今も残るゆるやかな坂道は、そうした古い地形の名残りである。

新旧の地図を見比べてみると、現在の中通りは、南部から細江、豊前田へと抜ける江戸時代の街道とほぼ重なり合う。ただし、岬之町の辺りは丘だったから、当時の街道はここだけは海側に迂回していた。国道九号線を越えた南側、現在のプラザホテル裏側を通る道が、南部町から細江に抜ける当時の街道であつたらしい。

い。この古い道は、現在も国道から南に出てそのまま国道に戻る細い道路になつていて、岬之町の地図に馬蹄形の不思議な形を刻んでいる。

この馬蹄形の道に囲まれた丘の海側の先端は、かつて「王子の鼻」と呼ばれた岬であり、江戸時代はそこに長府藩の番所が置かれていた。江戸時代の下関を描いた絵地図「長州赤間関名町」（金沢美術工芸大学収蔵）を見ると、現在の日銀下関支店の辺りから海に突き出した丘の先に、「王子ノハナ」と「番所」の文字が書き込まれているので、それを確認できる。そして、岬之町という漢字は地形が岬であることから、その読み方は「王子の鼻」という岬の古い呼び名から来ているらしい。

この絵地図を眺めると、更に面白いことが分かる。現在の入江町の辺りは、江戸時代には文字通り深い入り江になつていて、現在の国道の北側辺りまで海が入り込んでいた。明治時代に、岬之町の丘を切り崩した土砂などで、この入り江が埋め立てられ、入江町から細江町にかけての地所が海側に広がった。その後、細江町に国鉄の下関駅が置かれ、この付近は大分賑わつたようだ。そこにも残る旧山陽ホテルの建物を見れば、当時の繁栄がしのばれる。

目を岬之町の東側に転じてみよう。

現在、国道九号線の岬之町と観音崎町の間に、バス停「三百目」がある。これは日銀下関支店の最寄りのバス停である。最初にその名前を聞いたとき、何度か聞き返した覚えがある。水木しげるの妖怪百科に、目が百個ある「百目」という名前の妖怪が載っていたが、その親玉の名前かと思つたのだ。

三百目という地名は、かつてこの辺りに架けられていた橋の名前に由来するらしい。岬之町と観音崎町の境界線は、三百目の交差点から、丸山町の中山寺や池町方面に登つていく坂道だが、明治時代、この道は三百目通りと呼ばれていた。更にそれ以前の江戸時代には、ここに谷川が流れていたようだ。前述の江戸時代の絵地図でも、この辺りに幅の広い川が描き込まれている。現在は水路が地下に埋められているが、豪雨が降るとこの道に水が溢れ、まるで川のようになることから、昔の地形が知れるのである。

江戸時代、油屋仁左衛門という人がこの川に橋を架けて貰おうとして、長府藩に銀三百匁（もんめ）を寄進した。その結果、架けられた橋の名前が「三百目橋」となった。当時のお金の数え方では、銀を一匁、二匁と数えていって、百匁と切りの良い数字になると「百目」という。だか

ら、三百匁は「三百目」だ。つまり、三百目というのは金額のことなのである。銀六十匁は金一両だから、銀三百目は金五両ということになるが、年代が特定できないので現在の貨幣価値に換算して幾らになるか、正確なところは分からない。

この三百目橋とおぼしき橋が、前述の絵地図に描かれている。この橋は明治初年までは残っていたと伝えられるが、周囲が埋め立てられ、川も覆われて、現在は影も形もない。しかし、その名前だけは地名として残り、現在でも、交差点やバス停、ガソリンスタンドなどで、様々な三百目に出会うことができる。

もうひとつ、岬之町の地名に「藪之内」というのがある。日銀下関支店の北側に、功德院というお寺があり、その石段の登り口に「藪之内弁財天」と彫られた石碑が立っている。この弁財天は、かつて田中町に祠があった弁財天を移設したものでらしく、功德院の中の一室に弁財天像が祭られている。

この辺りが藪之内と呼ばれたのは、江戸時代、現在の日銀の北側に、三百目から岬之町の反対側に抜ける山越えの道があったためらしい。藪の中を通り抜ける山道なので藪之内、という分かりやすいネーミングだ。では、なぜ藪の中を通り抜ける必要

があったのか。

この山道は、冒頭に述べた「王子の鼻」を巡る街道を通らないで済むための近道だったのである。街道には番所があったから、それを避ける道であったのかもしれない。「三百目から岬之町の反対側に抜ける」ことを、「目からハナに抜ける」と言い、カラシが辛いときの描写に似ているので、この道の別名を「芥子小路」と洒落たらしい。そういう話が伝わっている程だから、それなりに使われた山道だったのだろう。

明治時代には丘が掘削され、山道は平らな広い道になった。日銀の北側を通るその道は、藪之内通りと呼ばれたが、現在では弁財天の石碑にその名をとどめる程度である。

日銀周辺のごく狭い領域だけで、これだけ多様な地名とエピソードが残っていることは、下関の歴史の奥深さを物語るものだと思う。

今回、エッセイの連載をさせて頂くこととなりました。岬之町にある日銀下関支店の周辺を中心に、下関の風物や歴史を巡る話題などをとりあげていきたいと思えます。どうぞよろしくお願いいたします。

(金沢美術工芸大学収蔵『書典通考卷之二 長州赤間関名町』より)

